

23 いらだつ性に優しく

深夜。ドターン、バターン。重度のぼけさん夫婦の部屋です。駆けつけた寮母は立ちすくみます。動けないと思っていた夫が妻を求めて、上ろうとしては落ちているのです。妻は両足が硬直し、夫はその上で安定できません。

しかし、寮母はすぐに思い直し、もう一人の寮母とともに夫を妻の上に乗せ、両側から支えてあげます。「夫婦だからちつとも恥ずかしくないのですよ」。妻

のうつろな目に心なしか恥じらいの色がよぎります。

それから数週間後、夫は脳血栓で深い眠りに陥ったまま旅立ちました。夫の死も分からぬまま妻は一年後に昇天。

ただ、傍観するだけであれば、ひとの性ほど、おぞましいものはあります。しかし、寮母がとっさにとったこの方法は見事です。このように、老いてからの性を温かく「受容」すべき場面は、意外と多いのです。

ある深夜、婦人部屋から絶叫——。駆けつけると、高山さんがベッドに起き直って蒼白です。そして激しい息づかい。そばに大男がぼう然と突っ立っています。芦刈さんです。大声で言い訳。「この女ごがわしに、夜、おいでまし」と言つて誘つた。だから来たら大騒ぎして——』とアンパン。

彼女は夕食後の話し合いを楽しみにしていました。彼はそれ以上のことを期待して忍びこんだ。男と女の違いです。

翌日の習字グループでは、今まで通り仲良く寄りそつて筆をとっています。



うっすらと「老いの性」が伝わってきます。

ある日の習字の手本は〈希望〉でした。高山さんはそのそばに小さく「お嫁に行きたい」と書き込んでいました。ぼけのしのび寄る中を、性愛もまた忍び足で進みます。

ですから、芦刈さんは家族から自宅復帰を求められているが、頑として聞きません。

「家に帰つたら男女の交際がない。ここにはそれができる」と、私たちにそっと言います。

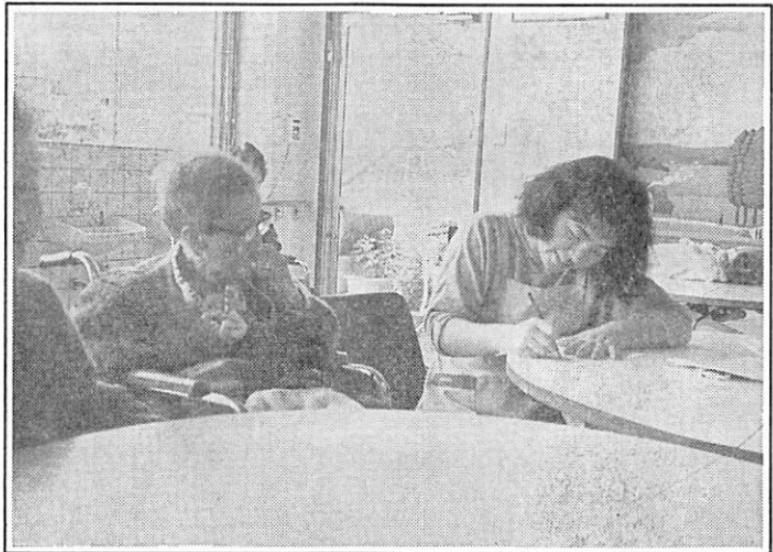
不自由なはずのホームにその自由があつて、自由な世間（社

会)は不自由だという。その言葉は、世間にも当然なければならないが、ホームでも性と愛の自由はあるべきだ、と強く訴えているのです。寮母の資質に「優しさ」が求められているが、とくに、高齢者の性と愛にどう対応するかによってそれが試されているともいえます。

九十九歳のHさんは三年前に失明。狂ったように「明かりをくれ!」と壁を伝って動き回るが、半年しておさまります。でも今度は夜昼の区別がなくなつたためか、性衝動が強く現れます。おむつを替える寮母に抱きつき「ここに寝な!」と切なく全身をゆります。

寮母はそんな時はカーテンを引き、熱いタオルで下半身をまんべんなくふきあげ、全身を軽くマッサージ。それだけですが、極めて効果的で、例外なく静まります。宙をまさぐる両手をしつかり握って、耳元近く話しかけます。お化粧の香りにも安らぐのが老い。

まれに婦人でも「もつと奥まで」とか、「真剣に! (ふいて)」と訴えることもあります。一般的に男性の性欲求を鎮めるホームのとり得る唯一の方法が、



「おりおりの歌」——〈孫二人雪合戦でさわぐだろう〉山室さんの
つぶやきがそのまま句になりました。寮母はつぶやくのを心静かに
待ち、それを書きとめます。

この清拭^{せいじき}です。任運荘の
発明とひそかに銘打って
います。

老年での性欲求表現の
男女差はいよいよ開きま
すが、その一つに男性側
の「おむつ願望」があり
ます。「おむつを当てて、
寮母さんに世話されて死
にたい」。隣のおむつ交
換の姿をカーテン内に想
像しながら「わしも男じ
や、ああ、おむつを当て
たい」と訴えます。多く

の場合、ホームでの男性の性欲求の最終解決は老衰して、おむつを当てるようになった時です。

女性についてまれに激しい例外はあるが、一般的には極めて抑制的です。ばかりとともに抑制がゆるむと異性を求める度が強まり、男性を見ると手をさし伸べ「ナ一、ナ一」と訴える。食事介助の男性職員の片手を離そうとしない。「ここはカギかけんのか?」と言っていたKさんは、寮母には顔をふかせないが、男子職員には、にこにこ顔。手を引かれると三十分の道を歩いて店へも。「赤ちゃんが出来た!」とも言います。